

ドナ R. ファルヴォ 著, 津田 司 監訳

上手な患者教育の方法

小野 宏 (愛知県心身障害者コロニー中央病院児童精神科部長)

患者の「不心得」に怒れる方への福音の1冊

患者は治りたくて受診するはずである。それなのに医者の出す「治るための指示」に従わないことが、あまりにも多すぎる。一体どういうことなのであろうかと怒ったり、悩んだりする。これは患者のほうが一不真面目であつたり、物わかりが悪いせいなのであろうか。われわれは、治るためなら患者はどんな犠牲でも払うはずだと思ひ込んでいるから、何をするかを伝えさえすれば、それで十分と信じているのである。したがって、自分の説明や説得の仕方についての技術的検討はあまりしたこともないのである。だから、こちらは説明したつもりなのに、あとで聞いてみると「わからなかった」と言われることも多いし、指示も「守らなかった」(あるいは「守れなかった」)ということにもなる。

それでは、どうしたらよいのだろうか。それに回答を与える本が出版されたので、怒れる先生、悩める先生方にぜひお勧めしたい。「上手な患者教育の方法」である。訳者は、以前からこの方面の問題に深い関心を持ち活躍されている、川崎医科大学の津田司先生らである。本書のおかげで米国の実践的な患者教育の仕方が日本語で簡単に読めるようになったのは嬉しいことである。

内容は、患者教育の必要性、概念などの基礎から、コンプライアンスのこと、助言の仕方、教育用の教材、インフォームドコンセントに至るまで、医療現場での患者教育を包括的にとらえて、具体的にかつわかりやすく述べられている。しかも、いわゆるパラメディカルスタッフの立場での教育もとりあげら

れている。

おもしろい本なので、周りの仲間に勧めてみたら、ふた通りの反応があつた。極端に分けると、一つは、「自分は患者教育などを大切にしている」というもの、もう一つは「基本的には治せばいいので、説明や教育は本当は必要ではない」というものだった。前者も、しかし、時間がないと教育的な働きかけを省略しやすいところがあり、本質的に患者教育や対応が医療の必須条件であるとは、まだ認められていないような方も少なくはなかった。

さらに患者対応の必要性を理解している方でも、実際の対応技術となると、誠意、良識、親切の域を越えないし、越える技術の存在すらご存じない方が圧倒的多数である。

心の問題が、実証可能で目に見えたりする自然科学の思考で処理しきれないので、その存在を無視してしまっているような気がしないでもない。心の時代といいながら、実際は心はまだまだ常識的な対応で済まされ続けているようだ。

医師・患者関係のコミュニケーションや教育がいかに立派な理念・理論であっても、それが「どんな言葉」で「どう話される」かが具体的に示されなくては、実践のガイドにはなりにくいものである。本書は優れた啓蒙的解説書であると同時に、実践的で良いガイドブックになっていて、「どんな態度で」「何を」「どんな言葉で」患者教育を行うべきかを沢山の例をあげて示している。

本書が契機になって、患者教育の技術演習を含むワークショップに発展することを期待したい。

(A 5判 302頁 3,605円(税込) 1992 医学書院刊)